
呪（まじな）う言葉

あきら るりの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まじな
呪う言葉

【ZPDFード】

2058

【作者名】

あきら ひ るりの

【あらすじ】

自分に自信が持てないあなたへ、伝えたい言葉がある。

ヒトは常に呪い呪われている。

+

聞き返した俺の声は我ながら非常に間抜けだった。彼女が小さな声で『ごめんね』と頭を下げて足早に走り去ったあとも何を言われたのか良くわからず、渡り廊下の真ん中でただ立ち尽くす。

俺としては一世一代の、当り前だ、初めて女の子を誘うという人生の中でも重要な一大イベントのはずで。

けれど俺の勇気に対しても返ってきた返事は俺には理解できず、また彼女の気持ちも分からず、このあとどうすればいいのかも予想つかず、ただ呆然としている自分がひたすら間抜けのようだ。

教えてくれ、一体彼女は何を言つたんだ？

しかし一生このクラブハウスに繋がる廊下で立ち尽くしているわけにもいかないし、これ以上間抜けな様子を行きかう同級生達に見せるのも限界がある。

溜息一つ。深く。息を吸つて。

「おい

心臓が跳ね上がる。振り返ると悪友がニヤニヤ笑いながら手を振つていた。

「何だよ」

何気なく返したつもりの言葉は、先程の落胆が祟つてか多少不機

嫌に寄つていた。

「振りられたかあ」

聞いてたのかよ。

「おつと」

悪友はおじけたよつて両手を軽く上げる。

「そんなに怒るなよ、たまたま聴こえちまつたんだ、わざとじやねえから」

「そつかよ」

参つた。憎まれ口しか出でこない。
餓鬼くせえつたら……

「お前あーゆータイプが好みだつたのか。意外だ」

「何がだ」

「だつて、普段読んでるマンガとかさ」

「一次元の趣味と現実を同一に語るな」

「まあ、親友といったしましては幾らでも励ましてあげましょつとも」

も

「冗談めいた感じで肩をばんばんと叩く。いいけど痛えよ。

返事の仕方が分からなくなつて黙り込むと、悪友の顔が段々真顔になつてくる。

「何だあ、マジか?」

「……わかんねえよ」

「わからんねえって何が」「彼女が何を言いたかったのかわからんねえよ」

+

彼女とはクラスは違うものの、同じクラブに所属している。ちなみに漫研。

どちらかというと技量のない分を努力でカバーしている俺とは違う、彼女は絵の技量もストーリー構築もかなり高水準にある漫画を描く。

でも、それだけじゃなくて彼女は何と言つか、細かい気遣いが素敵なヒトだ。

というわけで俺はクラブに所属してから2年目、段々自分の気持ちを自覚しつつあつたわけだが

今日はクラブハウス解禁の日だった。何の意味があるのか知らないうが、テスト期間中はクラブハウスに入つてはいけないという規則がこの学校にはあり……つまりはその間は部活動は一切出来ない。1週間ぶりの彼女との再会だった。しか�数日後には学校は夏休みに入つてしまつ。そうすると、またしばらくは彼女に会えないわけだ。

だから、俺は勇気を振り絞つたのだ。クラブハウスに繋がる渡り廊下へ、HR終了後にクラブハウスに向かうであろう彼女に先回りして。

……なんだけど。

「早めに行つて、部室へ風を通そうと思つて」

1週間も締めつぱなしにしていたからすゞことになつてゐるわよね、と微笑んだ彼女に、俺は夏休みに予定があるかまづ訊ねた。

「お盆には父の実家に帰るけど、特に合宿以外には予定はないわよ」

「あの……」

言葉の切れはおのずと悪くなつたが、俺は必死になつて彼女を映画に誘つたのだ。

彼女の顔が微かに曇つたのは、その瞬間だった。

「…………？」

「あの、俺……高岡のこと、その……気に、なつてるから」

一生懸命話していく俺の言葉はトーンダウンする。 彼女の表情に合わせて。

「幾谷君」

よつやく出てきた彼女の返事は消え入りそうに小さかつた。

「わたし、きっとつまらないから」

言葉を失つた俺を残して彼女は小さく『あんね』といつて部屋へ向かつて足早に去つてしまつたのだ。

そして、俺はその場に立ち尽くすしかなく。

+

「…………はあ。なるほどねえ」

購買の自販機で買つてきたブリックパックのコーヒーをすすつと飲み干し、悪友は空を見上げた。

「そりゃ確かに訳わからんわな」

「だろ?」

ストローをさしたままだつたブリックパックのオレンジジュースで口を潤して俺は悪友に同意を求める。

「んー、でも一つだけ分かってることがある

「何だよ」

「お前、まだ振られていなってこと」

「……どうをどうやつたらそういう結論になるわナ」

あれだけ拒否られたっての。π

「だつて高岡さん、お前にについては何も言つてないじゃん。『自分と付き合つても面白くない』って言つただけで」

熟考。確かに言つていな。言つてこないけれども

「もつー回へりこむるよ。碎けるのはそれからでもいいだ

る」

「……碎けるのが前提なのかよ」

「死満壘つてどいじゅねーの?」

無責任こもれい放ち、こじれと悪友は笑う。

「お前、俺のこと可哀想だと思つなら素直に応援しろよ」

「いや、お前に先に彼女を作られたら俺達の友情もこじれだしき」

「なんだそりゃあ」

繰り広げられる戯言に笑い声が自然と零れた。

+

「……あの……幾、谷くん」

部活が終わって解散したあと。予想を裏切つて、彼女が校門の前で待っていた。

「さつ もは……」めん。動転しちゃって
「いや」

そういう展開になるとは想像していなかつたため途惑いながらも返事をする。

「失礼だよね、幾ら何でも……あれから、きちんと話せないと、つて」

「ああ。振られるの確定か。俺。

「あのね、嬉しかつたよ。私」

ゆつくつ、言葉を区切つて話す彼女。

「けどね、一緒に映画を見に行つても、つまらないと思つんだ

「何が?」

「わたしと、一緒に行つても」

その言葉を聴いた途端、違和感に気がついた。

「高岡」

顔を上げた彼女に、俺は問ひ。

「何でつまらなこと思つの?」

「何でつて?」

「つまらなことかどうかって、高岡が決めじやなことじやないの?」

「……でも」

「俺さ。高岡と今までだつて、好きな漫画のこととか、描く漫画のこととか、いろいろなこと今までだつて話してゐじやない。それで俺が高岡のことつまらないとか思つてたら、高岡に甘いとか映画誘おうとか考えなによ」

「……」

「……まあ、高岡が俺のこと興味ないとか、嫌いとか思つているんだつたらじょうがねえけど」

「そんなことないよ。全へんなによ」

一緒に並んで歩いていた歩調がどんどん遅くなり立ち止まる。

同時に

「そんなんじやないよ……」
「じゃ、教えてよ。何でダメなのか」

口調と裏腹に、心臓は破裂直前だった。でも、あこまでしたくはなかった。

「前ね」

沈黙のあと、彼女がぽつぽつと語りだす。

「同じクラスの女の子達に、合コンに誘われたの。頭数揃えるだけだからって言われて……いるだけでいい、つていわれたから」

「うん」

「でも、何かずっと話しかけてくる男の子がいて……その子に好きな映画とか、俳優とか聞かれて」

「……うん」

「でもね、私あまり映画とか見にいくほうじゃなくて……お話を見るより、自分で作るほうが好きだから。それに、俳優とか顔覚えられないし」

「……まあ外人とかは余りよくわからないよね」

「……外人だからとかあんまり関係なくて……私、ヒトの顔覚えるの苦手なの。名前は大丈夫なんだけど……顔と名前一致させるのにすごい時間がかかるんだ」

同じクラスでまだ覚えていないヒトがいるし……と彼女は苦笑する。

そういえばそうだった。俺もなかなか名前覚えてもらえないくて……さつきも疑問形で呼ばれた気がするし。

名前をなかなか覚えてもらえないくてちょっとやきもきしたもんだけど、そうか覚えられなかつたのは顔なのか……それはそれで切ないけど。

「だからその人の質問にもうまく答えられなくて、正直に答えていたらね、言われたの。『つまらない女』って」

……思考停止。

「だから、誘ってくれたのは嬉しいんだけど、幾谷君がっかりするんじゃないかな、って……」

「……ひみつと待つてよ」

「？」

「それ、高岡悪くなじゅんよ。ただ単に見込みないなと思つたそいつが単に自分のつまらなさ棚に上げて高岡に棄て台詞吐いただけじゃねえかよ」

高岡さんは一気に喋りだした俺にびっくりしたのか、驚いた表情のまま固まつていた。

「……高岡はつまらなくなんかないよ」

言いながら、言葉のもつ力に驚かされる。ヒトせんなど簡単に呪われる。

「約1年間、同じクラブでだけの付き合いだけだ……」

慎重に言葉を選びながら。

「合コンで会つたとかいうやつと、俺とね。どっちが信じられる

？」

「……」

彼女は答えない。まあ信じてほしいのはやまやまだけど、即答もむずかしいだろつ。簡単に解けないからこそ、呪いなんだろつじ。だから。最後の勇気。

「だまされたと思つて、俺と一緒に映画行つてもうられませんか。そのあとは画材屋めぐりでも何でも」

彼女が微笑む。

返つて来た言葉は、夕方の空に小さく響いて消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8205y/>

呪（まじな）う言葉

2011年11月24日13時50分発行